

# エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡岩窟遺構出土の 中王国時代の土器に関する一考察

高橋 寿光

A Note on the Middle Kingdom Pottery from the Rock-cut Chambers at Northwest Saqqara, Egypt

Kazumitsu TAKAHASHI

2001年度から2003年度のエジプト、アブ・シール南丘陵遺跡における発掘調査において2基の岩窟遺構が発見された。本稿では岩窟遺構から出土した中王国時代の土器に関する考察を行ない、遺構の機能について手がかりを得ることとする。

2基の岩窟遺構から出土した土器群には、王家の埋葬に特別に使用されたクィーンズ・ウェアと同じ特徴を持つ土器が含まれており、また器種組成も埋葬に用いられる土器群の器種組成に類似した傾向を示している。ただし、遺構内部から明確な埋葬の痕跡は発見されていない。共に塑像、彫像が出土していることを考えると、これらの像に対する供物容器として納められていたと考えられる。土器群に関する考察を踏まえると、岩窟遺構は塑像や彫像の埋葬場所のような機能を持っていた可能性が窺われる。

キーワード：古代エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡、中王国時代、土器、器種組成

The Institute of Egyptology at Waseda University discovered two rock-cut chambers at a remote rocky outcrop in Northwest Saqqara in 2001 and 2003 respectively. Excavations in these chambers yielded a number of pottery shards dating from the mid to late Twelfth Dynasty of the Middle Kingdom together with fragments of statues made of terracotta, clay, and wood. This article aims to analyze the Middle Kingdom pottery from these rock-cut chambers in order to contribute to our understanding of these chambers and their functions.

The Middle Kingdom pottery from the rock-cut chambers include a distinctive type of red-burnished pottery vessel, so-called “Queens’ Ware/ Pyramid Ware,” which was specially used for the royal burials in the Twelfth Dynasty. Further, the pottery assemblages from the chambers are similar to those from contemporary royal burials. However, no traces of burials were identified in these chambers.

Considering the fact that a number of statues were found in the same chambers, it can be assumed that the pottery vessels were dedicated to statuary in a cult setting rather than to the deceased in a tomb context. Therefore, I would suggest that these chambers probably functioned as cult burial places for statues, ostensibly of divinities.

Key-words: Ancient Egypt, Saqqara, Middle Kingdom, pottery, pottery assemblage

## 1. はじめに

早稲田大学エジプト学研究所を中心とする調査隊は、1991年12月より、エジプト・アラブ共和国のアブ・シール南丘陵遺跡において発掘調査を継続している。同遺跡は、カイロ近郊のアブ・シール遺跡とサッカラ遺跡の間に位置し、最古のピラミッドとして名高いジェセル王の階段ピラミッドから約1km北西側の砂漠の中にある丘陵に営まれた遺跡である(図1, 2)。2001年度から2003年度の発掘調査<sup>1)</sup>(隊長: 吉村作治; 現場主任: 河合望)では、丘陵斜面より2基の岩窟遺構が発見された。本稿では、調査隊の呼称

に従い、発見された順に、丘陵の東側斜面に位置する岩窟遺構を「岩窟遺構 (AKT01)」、南側斜面に位置する岩窟遺構を「岩窟遺構 (AKT02)」と呼ぶ。

それぞれの岩窟遺構の部屋内部からは、中王国時代第12王朝中期から後期の土器が良好な状態で出土した(Yoshimura et al. 2005; Kawai et al. in press)。本稿では、これらの中王国時代の土器の分析を行い、2基の岩窟遺構の機能について手がかりを得ることを目的とする。



図1 サッカラ地図 (Yoshimura et al. 2005: fig. 1 をもとに作成)

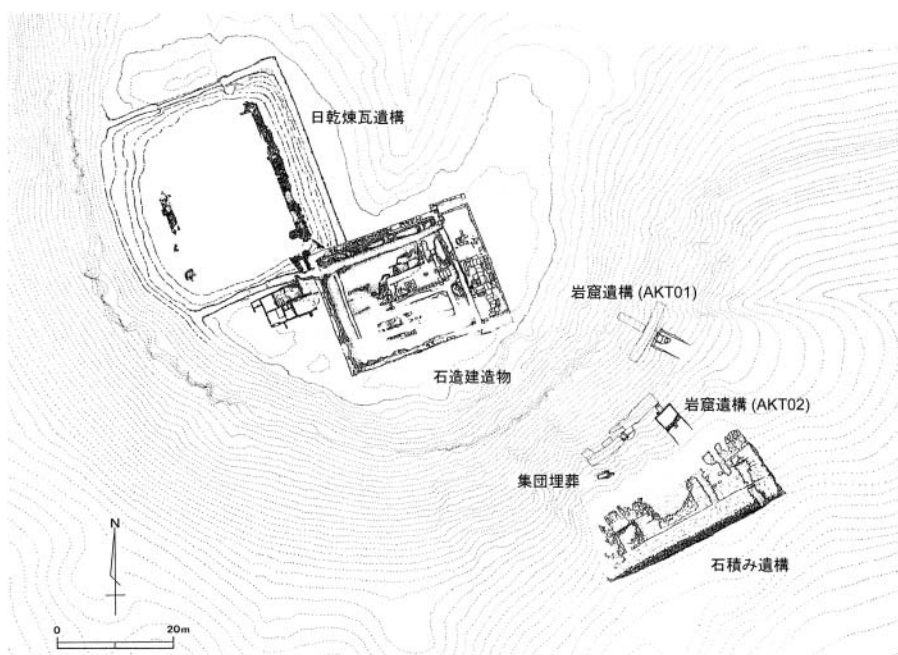


図2 アブ・シール南丘陵遺跡地図 (Yoshimura et al. 2005: fig. 2 をもとに作成)

## 2. 分析の方法

2基の岩窟遺構はいずれも既に攪乱されているが、土器自体は地下の部屋内部に置かれたままで、出土状況から、出土した土器は遺構の封鎖時の状況にある程度反映していると考えられる。従って、これらの土器の特徴や器種組成に関する分析を行うことで、岩窟遺構の封鎖時の機能について手がかりを得ることが期待される。

以下に、それぞれの遺構と土器の出土状況を概観し、その後、遺構ごとに出土土器の概要を述べ、特徴や器種組成に関する分析から、岩窟遺構の機能について考察を行なってみよう。

## 3. 遺構の概要と土器の出土状況

### 3.1. 岩窟遺構 (AKT01)

丘陵東側斜面に位置する岩窟遺構 (AKT01) は、前庭部と T 字型のプランを持つ地下の部屋で構成され、地下の部屋の入口には封鎖壁が築かれている。地下の部屋は、手前の部屋が「前室」、奥の部屋が「奥室」と名付けられている (図 3)。また、岩窟遺構 (AKT01) 自体には、造営年代を示すような装飾や文字等は書かれていない。

発掘調査の結果、地下の部屋は人の埋葬に用いられたものではないことが明らかとなっている。出土遺物は主に前室に集中しており、土器やライオン女神像を中心とするテ

ラコッタ製塑像、土製塑像、木製彫像等が発見された<sup>2)</sup>。入口の封鎖壁は一部取り除かれており、部屋内部は古代に盗掘されたものの、土器等の遺物は部屋の内部に残されたままとなっている。テラコッタ製塑像には古王国時代第 4 王朝のクフ王、第 6 王朝のペピ 1 世の名前が刻まれており、また様式の考察から、古王国時代に製作されたと考えられている。ただし、土器の年代が示すように、地下の部屋自体は中王国時代に封鎖されている。出土遺物の特徴や人間の埋葬がないということ等から、岩窟遺構 (AKT01) は、中王国時代に塑像、彫像の隠し場所として利用された可能性が提示されている (Yoshimura et al. 2005: 388-398)。

土器の周辺からは、種子<sup>3)</sup>等の植物遺存体や小型瓶 (図 5.7) の口径に対応する封泥が出土しており、土器群は供物容器として使用されていたと考えられている (吉村・近藤・長谷川他 2003: 41)。

### 3.2. 岩窟遺構 (AKT02)

南側斜面に位置する岩窟遺構 (AKT02) は、シャフトをはさんで東西にそれぞれ 1 室ずつ地下の部屋を持つ。調査隊の呼称に従い、以下、シャフトの東側の部屋を「東室」、西側の部屋を「西室」と呼ぶ。もともと、シャフトと東室が古王国時代初期に造られ、そして、中王国時代に、東室の新たな入口となる前庭部と西室が付け加えられるように

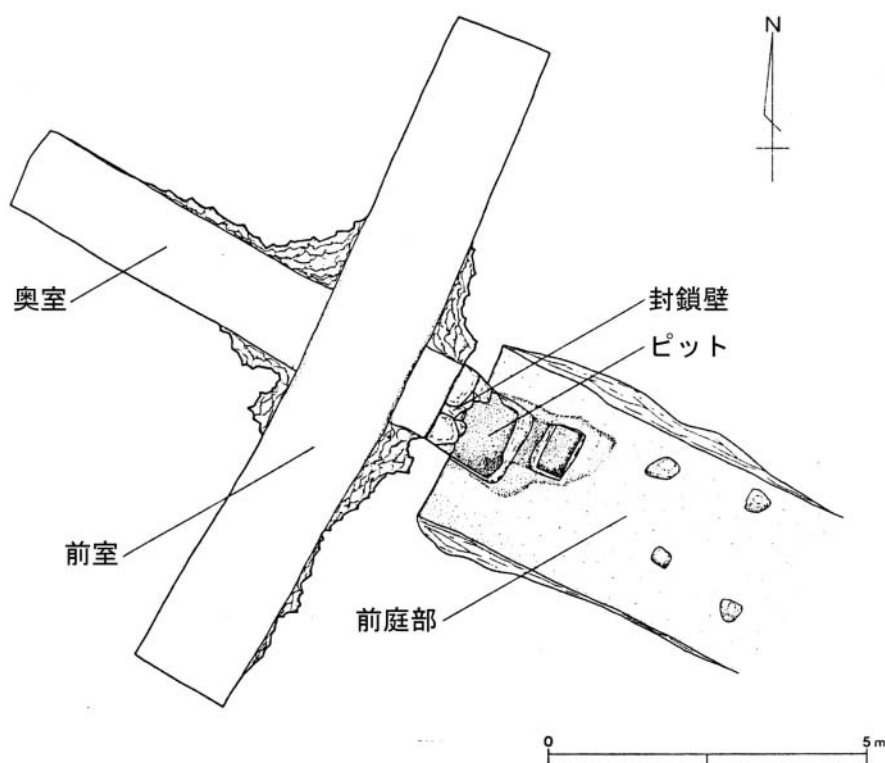


図 3 岩窟遺構 (AKT01) 平面図 (Yoshimura et al. 2005: fig.20 をもとに作成)



なる (図4; Yoshimura et al. 2005: 365)。

以下に、東室、西室の概要と土器の出土状況に関して述べてみたい。

### 3.2.1 東室

古王国時代初期に造営された東室は、シャフトの入口が一枚岩で封鎖される。内部に装飾等はない。シャフトの入口付近からは、初期王朝時代から古王国時代初期に年代付けられる象牙製像、ファイアンス製品、石製容器の模倣品、土製品、土器等が出土している。

一方、東室の北側の中王国時代に新たに穿たれた前庭部からの入口付近からは、中王国時代の土器や土製塑像、木製彫像が出土している。土器は床直上から出土しており、種子等の植物遺存体と共に出土していることから、供物容器として使用されていたと考えられている。また、前庭部から通じる入口には封鎖壁が残存している。

東室に通じる前庭部からは、2個体の器台が床面に据えられた原位置で出土している。片方の中型器台 (図8.2) には、鉢 (図8.1) が載せられたままである。出土状況から、供物奉納の場所として利用されていたと考えられている (Yoshimura et al. 2005: 365-380)。

出土状況から、古王国時代初期に造営された東室は、中王国時代に再利用され、東室の北側から前庭部にかけて、

何らかの祭祀を執り行う空間として利用されていたと想定されている (吉村・近藤・菊地他 2003: 26)。

### 3.2.2 西室

中王国時代にシャフトの西側に新たに付け加えられた西室でも、入口の封鎖壁が一部残存している。西室も既に攪乱を受けているものの、ほぼ原位置を保った状態で中王国時代の土器や植物製のマット、布、動物骨、種子等の供物が発見されている。入口付近から出土した植物製のマットの周りからは土器が出土しており、もともとマットの上に置かれていた可能性が考えられている。また、部屋の中央付近からは、土器と共に動物骨、種子、泥、ナトロン、布等が出土しており、もともとこれらの供物が土器に入れられていたと考えられている。このように西室の出土遺物は主に供物で構成されている (Yoshimura et al. 2005: 380-388)。

## 4. 出土土器の分析・考察

以下に、出土土器の特徴や器種組成に関する分析から、岩窟遺構の機能について考察を行なってみたい。本稿では、土器の名称に関しては、Do. アーノルド (Arnold) の分類を参照し、最大径と高さの関係等の数値に基づいた土器の器形分類を行った (Do. Arnold 1988: 135-136)<sup>4)</sup>。そして、

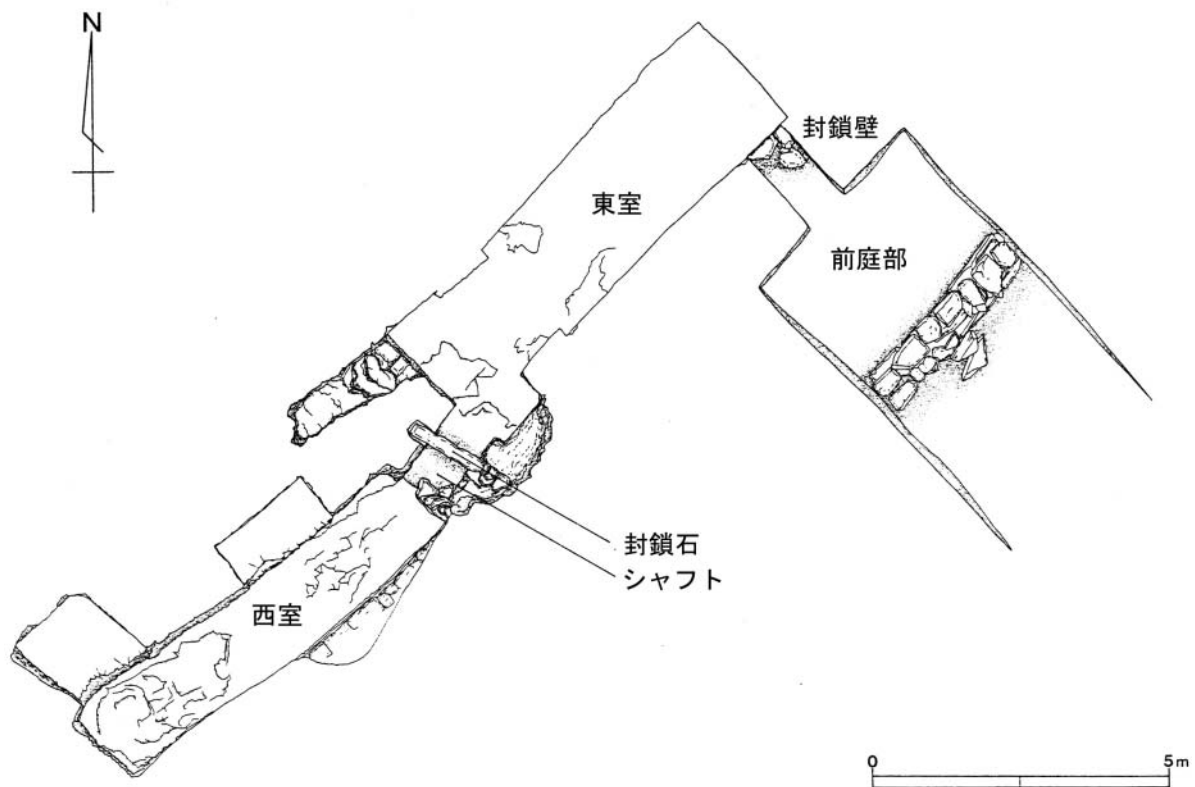


図4 岩窟遺構 (AKT02) 平面図 (Yoshimura et al. 2005: fig. 5 をもとに作成)

エジプトの土器研究において使用されている英語名称を日本語に訳し、便宜的に名称を与えた。器形分類の方法は以下のとおりである。

まず、口縁の径と最大径の割合から割り出した数値 (Aperture Index: 口径/最大径×100) が、85 以上を「開いた形」に、85 以下を「閉じた形」に分類した。そして、それぞれの形に対して、最大径と高さの割合の数値 (Vessel Index: 最大径/高さ×100) を基準とし、細分した。「開いた形」に関しては以下の4つに分類される。

- 皿 Vessel Index が 600 から 350
- 鉢 Vessel Index が 350 から 250
- 碗 Vessel Index が 250 から 110
- 深碗 Vessel Index が 110 以下

また、「閉じた形」に関しては以下の3つに分類した。

- 深皿 Vessel Index が 110 以上
- 壺 Vessel Index が 110 以下
- 瓶 Vessel Index が 110 以下かつ、頸部の高さが全体の高さの10分の1より高く、頸部の径が最大径の半分より小さい器形

大きさに関しては以下の基準をもとにした。

- 大型 高さあるいは最大径が 25cm 以上
- 中型 高さあるいは最大径が 25cm から 15cm
- 小型 高さあるいは最大径が 15cm 以下

また、数値に基づく定義以外にも、頸部の有無、口縁や底部の形状等により名称を付した。その他、蓋、器台等の特殊な器形に関しては、一般的に用いられている用語を用いた (cf. Holthoer 1977; Do. Arnold 1988: 135)。

胎土に関しては、10 倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システム (Vienna system) を参照し、記述を行った (Nordström and Bourriau 1993: 168-182; Bourriau et al. 2000: 130-132)。

#### 4.1. 岩窟遺構 (AKT01)

##### 4.1.1. 概要

出土した土器は 45 個体に復元された (図 5, 表 1)。全体的に丁寧に作られた良質な土器群であり<sup>5)</sup>、手ごね成形による大型尖底壺<sup>6)</sup> (図 5.8) 以外は (cf. Do. Arnold 1988: 135)、轆轤で成形され、入念に撫でが施されている。出土

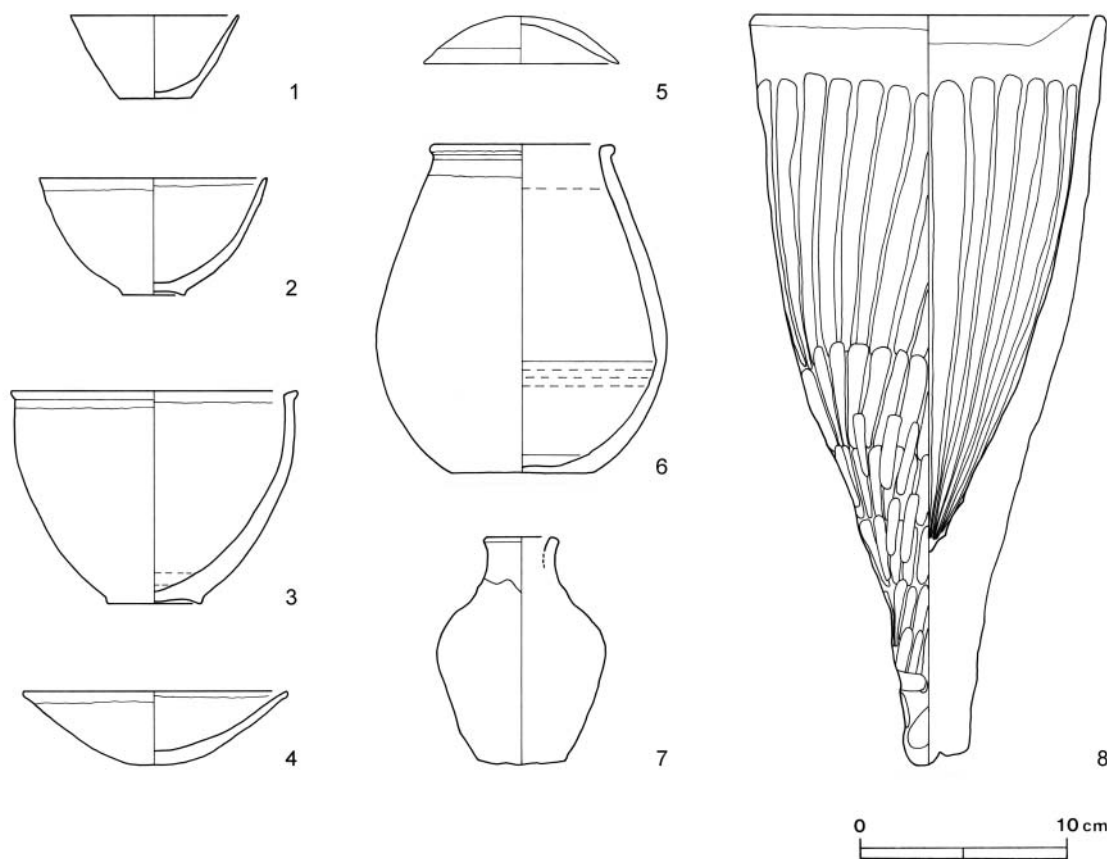


図 5 岩窟遺構 (AKT01) 出土土器 (Yoshimura et al. 2005: fig. 24 をもとに作成)

表1 岩窟遺構 (AKT01) 出土土器

図版番号	器形	胎土	スリップ	表面調整
図5.1	小型碗(赤色磨研)	Nile B <sub>1</sub>	全面に赤色スリップ	軽い磨研
図5.2	小型高台付碗	Nile B <sub>1</sub>	全面に赤色スリップ、口縁に白色スリップ	撫で
図5.3	中型高台付碗	Nile B <sub>1</sub>	全面に赤色スリップ、口縁に白色スリップ	撫で
図5.4	中型皿	Nile B <sub>1</sub>	口縁に白色スリップ	撫で、底部削り
図5.5	蓋	Nile B <sub>2</sub>	全面にピンク色スリップ、口縁に白色スリップ	撫で
図5.6	中型無頸壺	Nile B <sub>2</sub>	外面にピンク色スリップ、口縁に白色スリップ	撫で
図5.7	小型瓶	Nile B <sub>2</sub>	外面セルフスリップ、一部の土器に赤色スリップ	撫で
図5.8	大型尖底壺	Nile C	外面に赤色スリップ、口縁に白色スリップ	内外面に指の痕跡

した土器の中で特徴的なものは、小型碗(図5.1)である。この土器には赤色スリップが全面に施されており、また全体的に軽く磨かれている。胎土はよく精製されたもので、混和材はほとんど見られない<sup>7)</sup>。また、小型高台付碗(図5.2)、中型高台付碗(図5.3)は、磨かれてはいないものの、前述の小型碗と同じように赤色のスリップが全面に塗布されている。

また、小型高台付碗(図5.2)、中型高台付碗(図5.3)、中型皿(図5.4)、蓋(図5.5)、中型無頸壺(図5.6)には、口縁に白色スリップが施されている<sup>8)</sup>。蓋は、中型無頸壺と口径が対応し、同色のスリップが施されていることから、中型無頸壺の蓋であると判断される。

#### 4.1.2. 分析

出土した土器の中で、遺構の機能を考える上で重要なものは、先に出土土器の中でも特徴的であったとした小型碗(図5.1)である。赤色スリップが全面に塗布され、軽く磨かれ、精製された胎土で製作される、という特徴を持つ土器は、S. アレン(Allen)によってクィーンズ・ウェア(Queens' ware)と名付けられており、岩窟遺構(AKT01)出土の小型碗は、土器製作技法の点で一致する。彼女は中王国時代の王妃、王女の埋葬に使われた土器の集成から、クィーンズ・ウェアが王家の埋葬に特別に使用された可能性を指摘しており<sup>9)</sup>、中王国時代のセンウセレット2世の治世から第13王朝に年代付けている(Allen 1998)<sup>10)</sup>。

その他、磨かれてはいないものの、小型高台付碗(図5.2)、中型高台付碗(図5.3)は、全面に赤色スリップが施され、精製された胎土で製作されており、製作技法上でクィーンズ・ウェアとの類似が見られる。これらの土器はアレンが既に指摘しているようにクィーンズ・ウェアに似せて製作した可能性が考えられる<sup>11)</sup>。

器種組成を見ると、岩窟遺構(AKT01)から出土した45個体中、小型碗が14点、小型瓶が17点と、全体の69%を占める点の特徴的である(図6, 表5)。これは小型皿・碗、瓶が多くを占め、そしてその他に大型の皿・碗<sup>12)</sup>

で構成される中王国時代の埋葬に用いられた土器の器種組成と概ね類似した傾向を示しているように思われる。

主な比較資料としては、以下の2例を挙げる事ができる。中王国時代第12王朝アメンエムハト2世の時代に年代付けられるダハシュールのイタ王女の墓から未盗掘で出土した土器群は、小型碗が58%、中型から大型の瓶が10%、供物の入った大型皿が5%という構成となっている(De Morgan 1903: 55, fig.105)。また、中王国時代の第12王朝センウセレット2世の時代に年代付けられるラフーンの10号墓から出土した土器群は、小型皿・碗が47%、瓶が17%、大型壺が15%、大型碗が9%である(Brunton 1920: 13, pls.XVIII.1-21, XIX.55-69)<sup>13)</sup>。

一方、葬祭殿等において儀式に使用された土器群の器種組成とは差異が見られる。アビュドスのセンウセレット3世葬祭殿の入口脇からは、日々の儀式に用いられ、廃棄されたと考えられる土器群が出土している。これらは粗製の深碗、小型皿を主体としており、それぞれ62%、24%を占めている(Wegner 2000: 112, fig.20)。また、同じく住居址から出土した土器群の器種組成とも異なっており、アビュドスの住居址では丸底碗、大型丸底壺、器台が主に出土している(Wegner 2001a: 296)。

岩窟遺構(AKT01)から出土した土器について分析を行った結果、埋葬に特別に使用されるクィーンズ・ウェアの特徴を備える土器やその類似品が多く含まれていること、器種組成が埋葬に用いられる土器の器種組成と類似した傾向を示す等、埋葬に用いられた土器群との関連を窺うことができた。

#### 4.1.3. 考察

分析からは、岩窟遺構(AKT01)から出土した土器群は、埋葬に用いられた土器群との関連が見られた。ただし、前述したとおり、地下の部屋内部からは明確な人の埋葬の痕跡は発見されておらず、これらの土器が何のために部屋内部に納められたかについて疑問が残る。

出土状況からは、共に納められた塑像、彫像に対する供

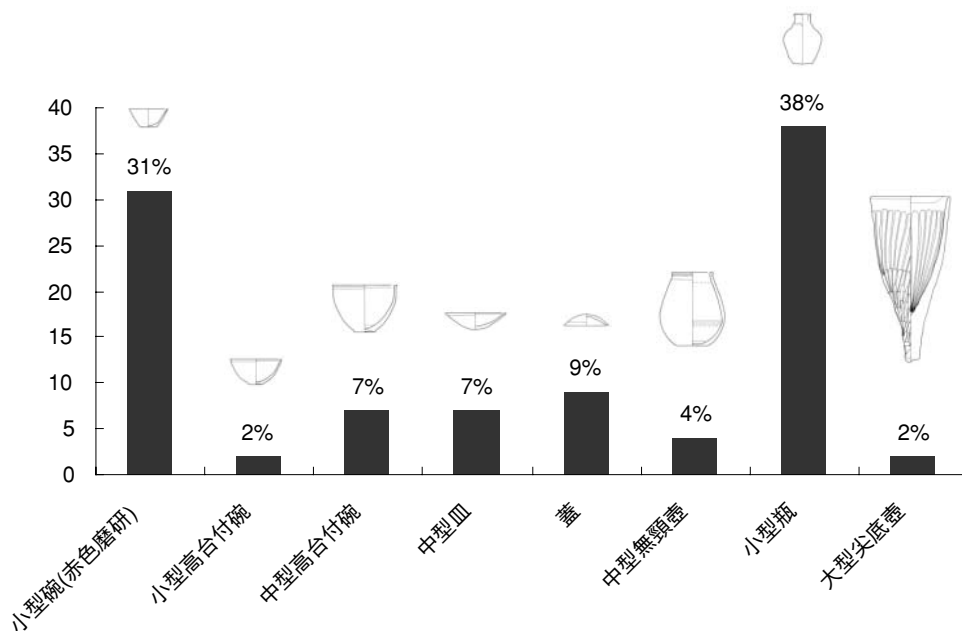


図6 岩窟遺構 (AKT01) 器種組成

表2 岩窟遺構 (AKT02) 東室出土土器

図版番号	器形	胎土	スリップ	表面調整
図7.1	小型鉢	Nile B <sub>2</sub>		撫で
図7.2	小型碗	Nile B <sub>2</sub>		撫で
図7.3	小型碗(赤色磨研)	Nile B <sub>1</sub>	全面に赤色スリップ	軽い磨研
図7.4	小型丸底壺	Nile B <sub>2</sub>		撫で、底部削り
図7.5	小型瓶	Nile B <sub>2</sub>	外面セルフスリップ、一部の土器に赤色スリップ	撫で
図7.6	中型丸底碗	Nile B <sub>2</sub>		撫で、底部削り
図7.7	中型高台付碗	Nile B <sub>1</sub>	全面に赤色スリップ、口縁に白色スリップ	撫で
図7.8	蓋	Nile B <sub>2</sub>	全面にピンク色スリップ、口縁に白色スリップ	撫で
図7.9	中型無頸壺	Nile B <sub>2</sub>	外面にピンク色スリップ、口縁に白色スリップ	撫で
図7.10	大型碗	Nile B <sub>2</sub>	全面に赤色スリップ	撫で
図7.11	大型器台	Nile C	外面に赤色スリップ	撫で

物を納めた容器であった可能性が考えられ、そして、土器に関する分析を踏まえると、岩窟遺構 (AKT01) は塑像、彫像の埋葬場所のような機能を持っていた可能性が考えられる。

## 4.2. 岩窟遺構 (AKT02)

### 4.2.1. 東室

#### 4.2.1.1. 概要

東室内部から出土した土器には、岩窟遺構 (AKT01) と類似した土器も含まれており、63 個体に復元された (図7, 表2)。轆轤で成形され、入念に撫でが施されており、全体的に丁寧に作られた土器群である。出土した土器の中

で特徴的なものは、岩窟遺構 (AKT01) と同じく、赤色スリップが全体に施され、軽く磨かれた小型碗 (図7.3) である。また、磨研されていないものの、中型高台付碗 (図7.7)、大型碗 (図7.10) には小型碗と同じように赤色スリップが全面に施されている。

その他、中型高台付碗 (図7.7)、蓋 (図7.8)、中型無頸壺 (図7.9) には口縁部に白色のスリップが施されている。蓋 (図7.8) は中型無頸壺 (図7.9) と口径の寸法が対応し、同色のスリップが施されていることから、中型無頸壺の蓋であると考えられる。また、小型丸底壺 (図7.4)、小型瓶 (図7.5) と口径が対応する封泥が出土している。

また、東室の前庭部からは、1 点の中型碗 (図8.1)、2

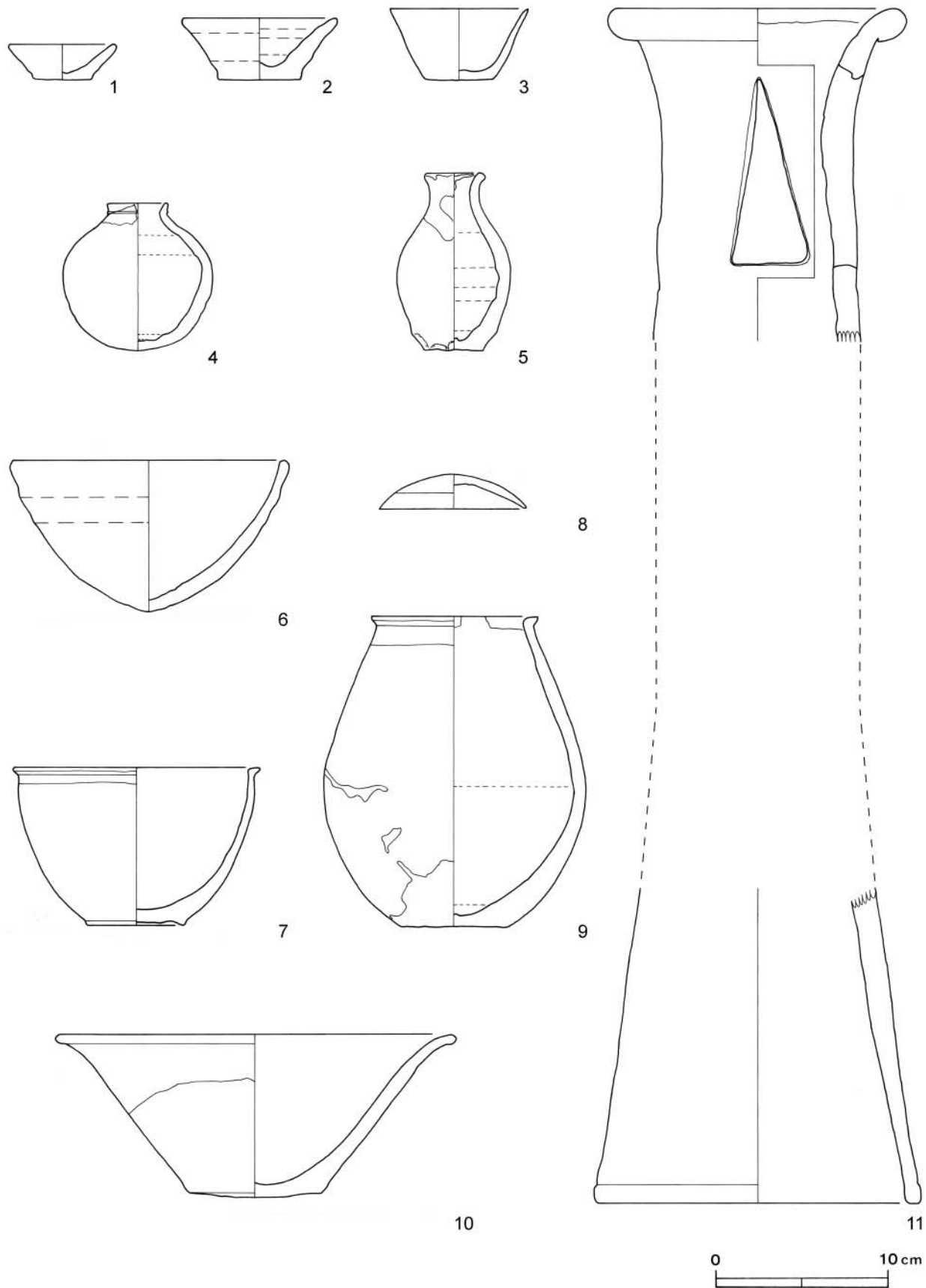


図7 岩窟遺構 (AKT02) 東室出土土器 (Yoshimura et al. 2005: fig.14 をもとに作成)



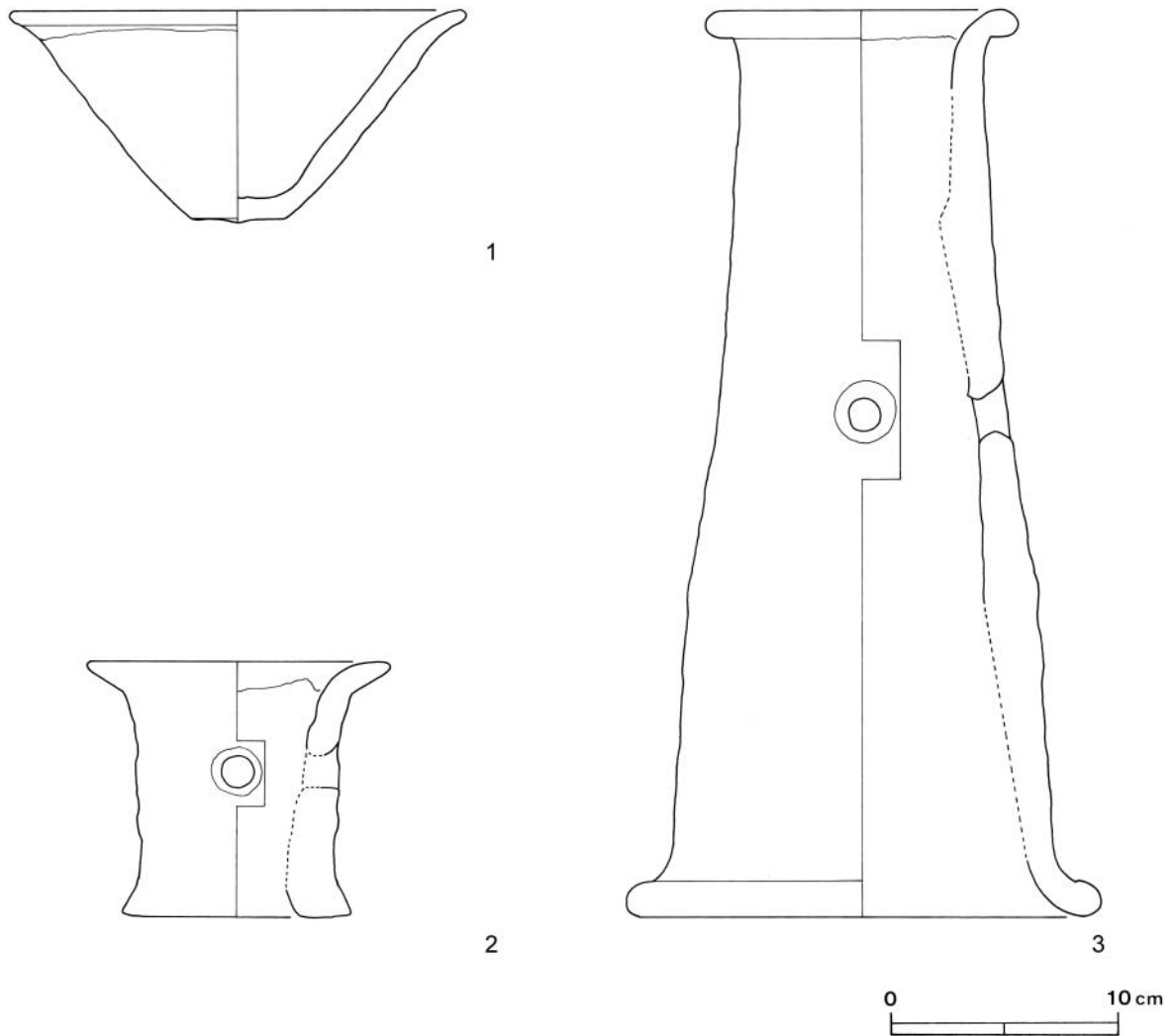


図8 岩窟遺構（AKT02）前庭部出土土器（Yoshimura et al. 2005: fig.14 をもとに作成）

表3 岩窟遺構（AKT02）前庭部出土土器

図版番号	器形	胎土	スリップ	表面調整
図8.1	中型碗	Nile B <sub>2</sub>	内面に赤色スリップ	撫で
図8.2	中型器台	Nile C	外面に赤色スリップ	撫で
図8.3	大型器台	Nile C	外面に赤色スリップ	撫で

点の器台（図 8.2, 3）が原位置で出土しており、共に赤色スリップが施されている（表 3）。

#### 4.2.1.2. 分析

赤色スリップが全体に施され、軽く磨かれた小型碗（図 7.3）は、王家の埋葬に特別に使用されたクィーンズ・ウェアと、製作技法の点で同一である。また、中型高台付碗（図 7.7）、大型碗（図 7.10）は磨かれていないが、赤色スリップが全面に施されており、クィーンズ・ウェアを模倣

して製作した可能性が考えられる。

2点の器台（図 7.11）が出土している点が異なるものの、器種組成も岩窟遺構（AKT01）や中王国時代の埋葬に用いられた土器の器種組成と類似した傾向を示しており、65 個体中、小型皿が 12 点、小型碗が 13 点、小型瓶が 18 点で、全体の 67%と優勢を占めている（図 9, 表 5）。

また、東室に付属する前庭部に関しては、原位置で器台と鉢がセットで出土している。古代エジプトでは、器台と鉢のセットは供物を捧げる祭祀に使用されていたことが、

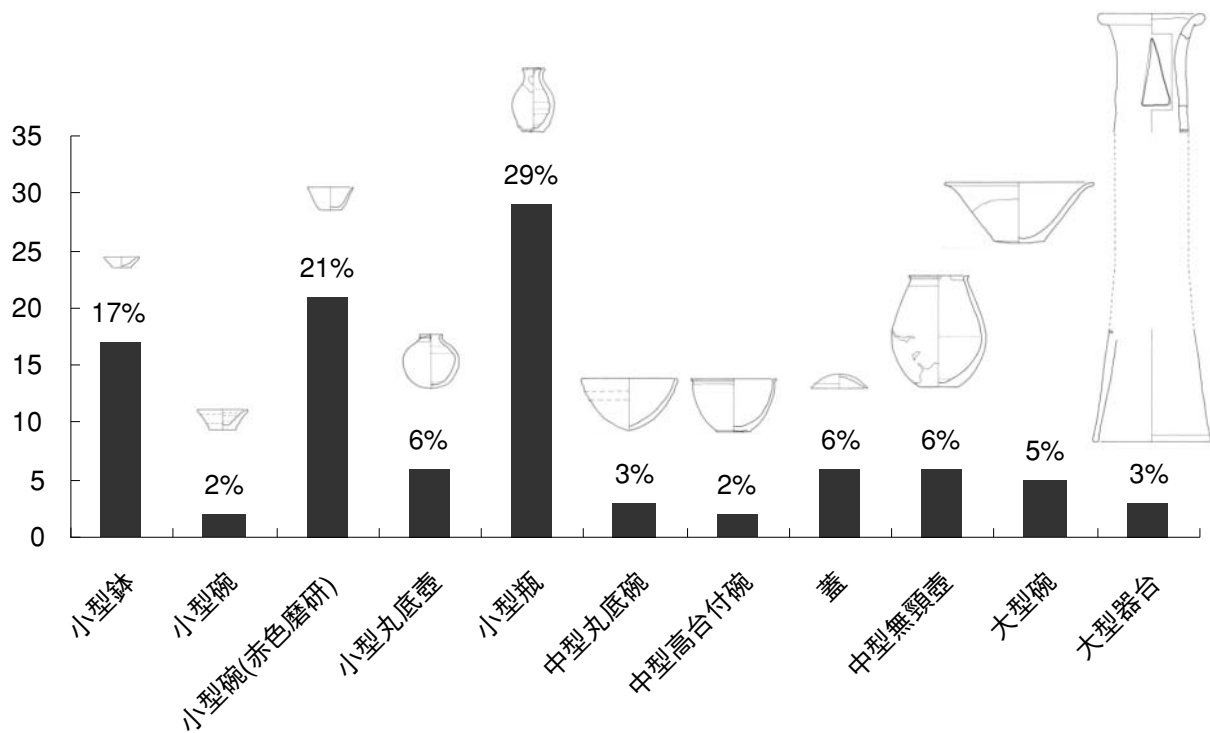


図9 岩窟遺構 (AKT02) 東室器種組成

考古資料、図像資料等からよく知られている (cf. Rzeuska 2001: 165)。中王国時代の原位置での器台の出土例はあまり知られていないが、古王国時代ではギザのメリヘテブのマスタバ墓等から原位置で出土した例が知られている (Junker 1929: 199-201, fig.40)。また、古王国時代の墓の壁画 (cf. Rzeuska 2001: 165) や中王国時代のステラ (cf. Bourriau 1988: no.36) 等には、しばしば供物を捧げる祭祀の場面に器台と土器のセットが描かれている。

#### 4.2.1.3. 考察

東室から出土した土器群について分析を行った結果、岩窟遺構 (AKT01) と同じく、王家の埋葬に特別に使用されたとされるクィーンズ・ウェアの特徴を持つ土器やその類似品が多く含まれており、また、器種組成は埋葬に用いられる土器の器種組成と類似した傾向を示していた。

岩窟遺構 (AKT01) と同じく、部屋内部からは明確な人の埋葬の痕跡は発見されていない。出土状況から、土器は共に出土した土製塑像、木製彫像に対する供物容器であった可能性が考えられ、土器群が埋葬に用いられる土器と類似している点を踏まえると、塑像、彫像の埋葬場所としての機能を持っていた可能性を窺うことができる。

また、東室の前庭部では供物を捧げる儀式が行われていたことが想定されているが (Yoshimura et al. 2005: 378)、

それを補足する分析結果が得られた。

## 5.2. 西室

### 5.2.1. 概要

岩窟遺構 (AKT01) や東室と類似した器形が含まれており、126 個体に復元された (図 10, 表 4)。全体的に丁寧に作られた良質なもので、手ごね成形による大型尖底壺 (図 10.11) 以外は、轆轤で成形され、入念に撫でが施されている。特徴的なものは、岩窟遺構 (AKT01)、東室と同じく、赤色スリップが全体に施され、磨かれ、そして混和材をほとんど含まない胎土の小型碗 (図 10.3) である。また、中型碗 (図 10.5)、大型鉢 (図 10.10) には、磨かれてはいないものの、全面に赤色スリップが施されている。

その他、中型皿 (図 10.6) には土器の口縁部に白色のスリップが施されている。また、小型瓶 (図 10.7)、小型丸底壺 (図 10.9)、大型尖底壺<sup>14)</sup> (図 10.11)、大型壺 (図 10.12) には、それぞれ口径が対応する封泥が出土している。

### 5.2.2. 分析

西室からは、岩窟遺構 (AKT01)、東室と同じく、赤色スリップが全体に施され、磨かれた小型碗 (図 10.3) が出土しており、これも前述した王家の埋葬に特別に使用され

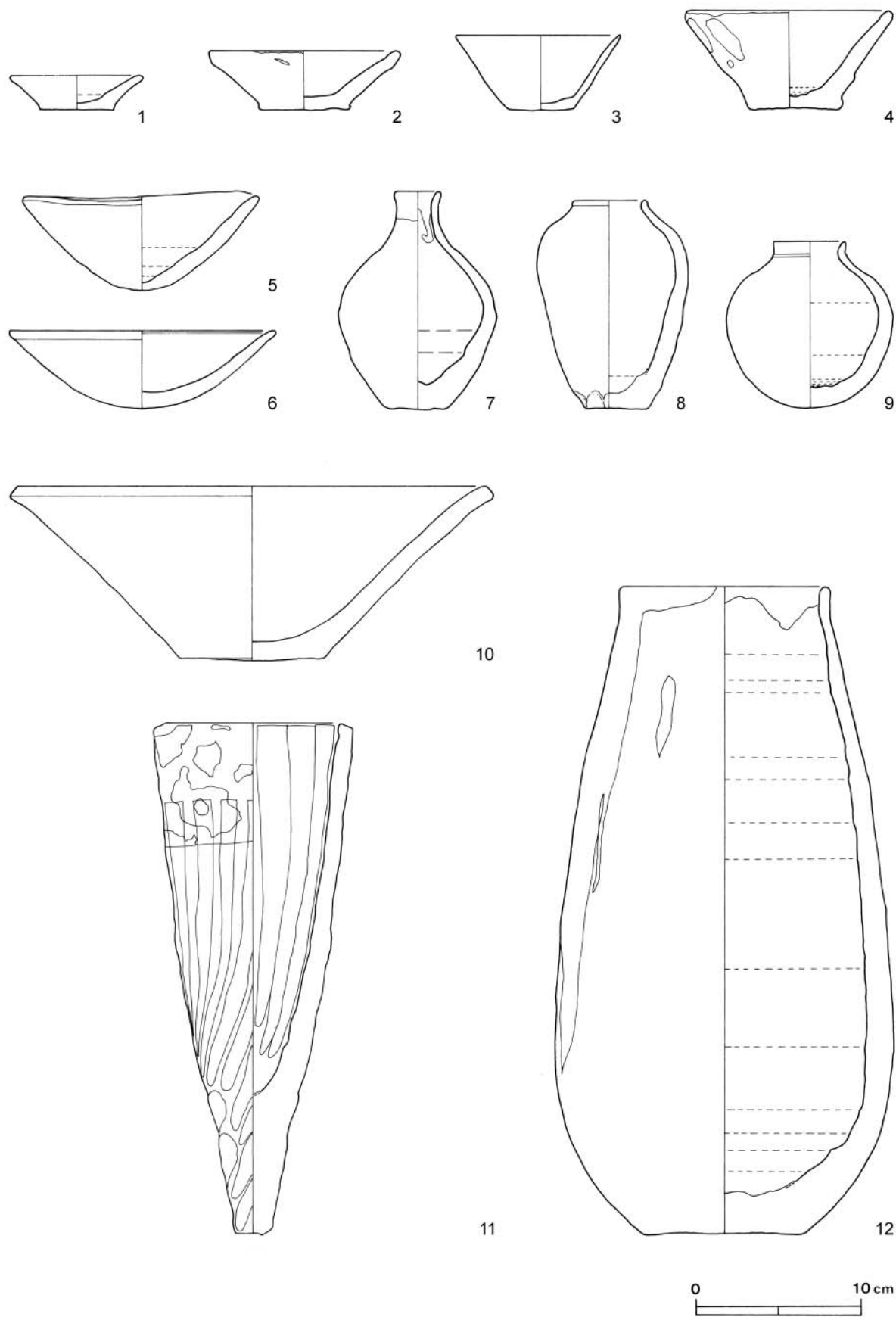


図10 岩窟遺構（AKT02）西室出土土器（Yoshimura et al. 2005: fig.19 をもとに作成）

表4 岩窟遺構 (AKT02) 西室出土土器

図版番号	器形	胎土	スリップ	表面調整
図10.1	小型皿	Nile B <sub>2</sub>		撫で
図10.2	小型鉢	Nile B <sub>2</sub>	内面に赤色スリップ	撫で
図10.3	小型碗(赤色磨研)	Nile B <sub>1</sub>	全面に赤色スリップ	軽い磨研
図10.4	小型碗	Nile B <sub>2</sub>	内面に赤色スリップ	撫で
図10.5	中型碗	Nile B <sub>2</sub>	全面に赤色スリップ	撫で、底部削り
図10.6	中型皿	Nile B <sub>1</sub>	口縁に白色スリップ	撫で、底部削り
図10.7	小型瓶	Nile B <sub>2</sub>	外面セルフスリップ、一部の土器に赤色スリップ	撫で
図10.8	小型壺	Nile B <sub>2</sub>		撫で、底部に指の痕跡
図10.9	小型丸底壺	Nile B <sub>2</sub>		撫で、底部削り
図10.10	大型鉢	Nile B <sub>2</sub>	全面に赤色スリップ	撫で
図10.11	大型尖底壺	Nile C	外面に赤色スリップ、白色スリップ	内外面に指の痕跡
図10.12	大型壺	Nile C	外面に赤色スリップ、白色スリップ	撫で

表5 遺構別器種組成

出土遺構		岩窟遺構(AKT01)	岩窟遺構(AKT02)東室	岩窟遺構(AKT02)西室
器形/図版番号				
小型皿	図10.1			13
小型鉢	図7.1, 10.2		11	4
小型碗	図7.2		1	
小型碗(赤色磨研)	図5.1, 7.3, 10.3	14	13	77
小型碗	図10.4			8
小型高台付碗	図5.2	1		
小型丸底壺	図7.4, 10.9		4	1
小型壺	図10.8			5
小型瓶	図5.7, 7.5, 10.7	17	18	2
中型丸底碗	図7.6		2	
中型高台付碗	図5.3, 7.7	3	1	
中型碗	図10.5			2
中型皿	図5.4, 10.6	3		2
蓋	図5.5, 7.8	4	4	
中型無形壺	図5.6, 7.9	2	4	
大型鉢	図10.10			4
大型碗	図7.10		3	
大型尖底壺	図5.8, 10.11	1		5
大型壺	図10.12			3
大型器台	図7.11		2	
合計		45	63	126

たクィーンズ・ウェアと同じ製作技法で作られている。また、中型碗(図10.5)、大型鉢(図10.10)には赤色スリップが全面に施されており、クィーンズ・ウェアを真似たものと考えられる。

器種組成は岩窟遺構(AKT01)、東室とは若干異なった傾向を示しており、126個体中、小型碗が全体の60%を占めている。また、小型皿が10%、小型鉢も7%と優勢である(図11, 表5)。

類似した器種組成は中王国時代の埋葬室の供物を貯蔵する脇室から出土した土器に見られる。正確な器種組成は報

告されていないものの、ダハシュールの中王国時代第12王朝のウェレト王妃墓の埋葬室の脇室から出土した土器群では小型碗が大半を占めている(Allen 1998: 44)。また、リシエトの中王国時代のセンプテス墓では、同じく埋葬室の脇室から、108個体の土器が出土し、小型皿と壺が大勢を占めており、その他に大型皿にカモやウシ等の供物が納められている(Lancing 1907: 164)。

また、個体数の上でも西室と前述のウェレト王妃墓の埋葬室の脇室から出土した土器群では類似した傾向が見られる。ウェレト王妃墓の埋葬室では25個体が納められてい



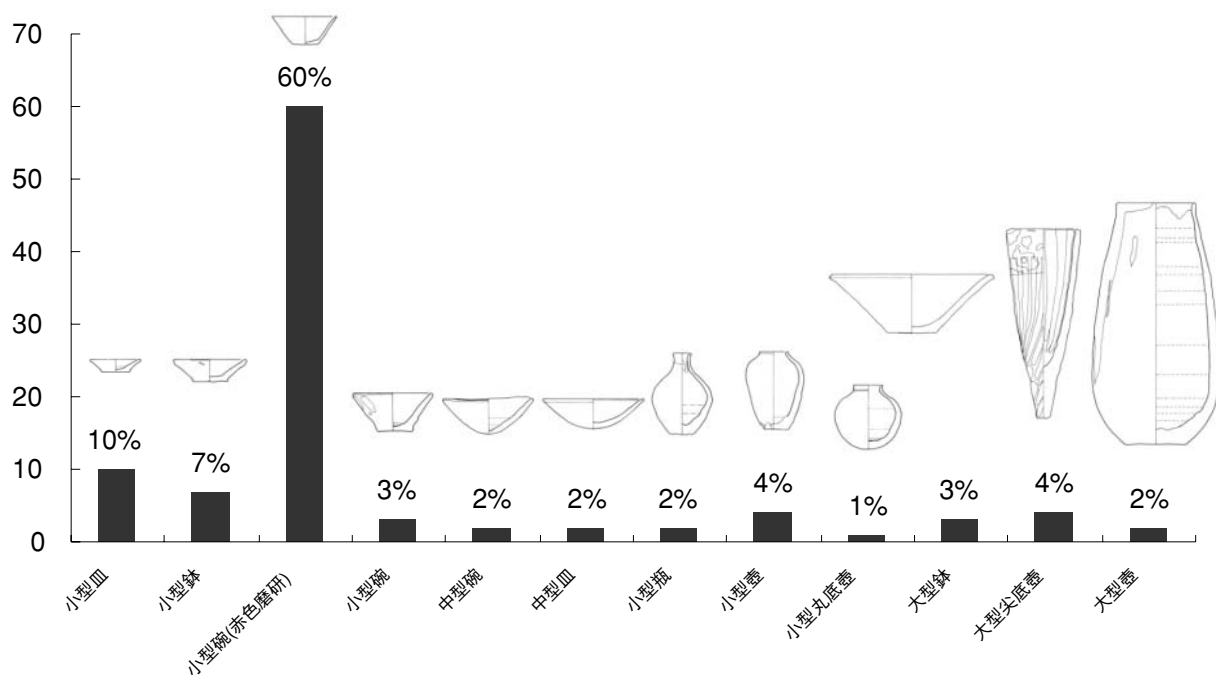


図 11 岩窟遺構 (AKT02) 西室器種組成

るのに対し、脇室には 100 個体以上の土器が納められている (Allen 1998: 44)。岩窟遺構の例では、岩窟遺構 (AKT01) が 45 個体、東室が 63 個体であるのに対して、西室では 126 個体が出土している。

### 5.2.3. 考察

西室から出土した土器群には、王家の埋葬に特別に使用されたとされるクィーンズ・ウェアと同じ特徴を持つ土器やその類似品が多く含まれており、埋葬との関連を窺うことが出来た<sup>15)</sup>。また、類似した器種組成が中王国時代の埋葬室の供物を貯蔵する脇室から出土した土器群に見られることから、西室は東室に付属し、供物を貯蔵する脇室としての機能を持っていたと考えられる。これは土器の個体数が東室に比べて多い点や、植物製のマットや動物骨、種子、泥、ナトロン、布等の供物が東室に比べ多数出土していることから支持されるであろう。

土器に関する考察からは、東室は埋葬場所、そして西室は供物を貯蔵する脇室である可能性が指摘された。中王国時代第 12 王朝の王墓や私人墓では、しばしば埋葬室と供物を貯蔵する脇室という関係が見られるが (Di. Arnold 1987: 99)、岩窟遺構 (AKT02) を全体として見ると、墓のような遺構であった可能性が考えられる。

## 6. 小結

エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡の 2 基の岩窟遺構か

ら出土した中王国時代の土器に関する分析を行なった結果、岩窟遺構 (AKT01) では、埋葬に用いられた土器群との関連を窺うことができた。地下の部屋内部からは、明確な人の埋葬の痕跡は発見されておらず、出土状況から、共に出土した塑像や彫像に対する供物容器であったと考えられることから、塑像、彫像の埋葬場所としての機能を持っていた可能性を提示した。

岩窟遺構 (AKT02) 東室から出土した土器群も、岩窟遺構 (AKT01) と同じく、埋葬に用いられた土器群との関連を窺うことができた。地下の部屋内部からは、明確な人の埋葬の痕跡は発見されていないことから、共に出土した塑像、彫像の埋葬場所としての機能を持っていた可能性を提示した。また、岩窟遺構 (AKT02) 西室から出土した土器群は、器種組成、出土個体数に、埋葬室の供物を貯蔵する脇室から出土した土器群との類似が見られることから、東室の供物を貯蔵する脇室であった可能性を指摘した。岩窟遺構 (AKT02) 全体では、墓のような遺構であった可能性を述べた。

アブ・シール南丘陵遺跡の 2 基の岩窟遺構は、塑像、彫像の埋葬場所であった可能性を出土土器の考察から提示した。ただし、中王国時代において、像と共に埋葬に用いられる器種組成の土器群が出土する例としては、ディール・アル＝バハリ<sup>16)</sup>、ダハシュール<sup>17)</sup>等で特定の人物のカー彫像に伴って出土する例が挙げられるのみで、岩窟遺構のように神々の塑像、彫像と共に埋葬に用いられる土器群が

納められた例はほとんど知られていない<sup>18)</sup>。今後は、本稿で提示した塑像、彫像の埋葬場所の可能性も踏まえながら、岩窟遺構から出土した他の遺物の考察を行ない、遺構の機能については更に検討を重ねていくことが望まれる<sup>19)</sup>。

## 謝辞

本稿は日本西アジア考古学会第11回大会にて発表した「エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡岩窟遺構出土の中王国時代の土器に関する一考察」(高橋2006)をまとめたものである。本稿を草するにあたって、早稲田大学吉村作治教授、早稲田大学近藤二郎教授には、資料使用の許可を頂きました。早稲田大学エジプト学研究所の河合望氏、柏木裕之氏、西坂朗子氏、矢澤健氏には数々のご協力を頂きました。草稿を査読していただいた先生方からも貴重なご指摘を頂きました。また、ポーランド科学アカデミーのT. ジュースカ氏、ベルリン自由大学のR. シストル氏には中王国時代の土器に関する助言を頂きました。ここに記して感謝いたします。

## 註

- 1) 2001年度から2003年度の調査については主に以下を参照(吉村・河合他2003; 吉村・近藤・菊地他2003; 吉村・近藤・長谷川他2003; 吉村・河合他2004; 吉村・近藤・河合他2004; Yoshimura and Kawai 2002, 2003, 2005; Yoshimura et al. 2005)。
- 2) 岩窟遺構から出土した塑像、彫像の年代、性格に関しては河合氏によって発表されている(河合2006)。
- 3) 岩窟遺構から出土した植物遺存体に関しては、ファハミー氏による分析が行われている(ファハミー2006)。
- 4) こうした器形分類は、その他にJ. ボリオウ(Bourriau)やD. アストン(Aston)等によってエジプトの土器研究で用いられている(Bourriau and Aston 1985: 41; Aston and Aston 2001: 53-54)。研究者によって器形分類の基準とする数値や用語に若干の差異はあるものの、エジプトの土器研究では一般的な方法のひとつとなっている。
- 5) 岩窟遺構(AKT02)前庭部で儀式に使用され、廃棄されたとされる同時代の粗製土器が、周辺から数百個体以上発見されている。これらの土器群は焼成不良で整形も粗いものが多く(吉村・近藤・河合他2004: 32; Yoshimura et al. 2005: 399-400)、質・量、共に岩窟遺構の地下の部屋内部から出土した土器群との相違が見られる。岩窟遺構外部から出土した中王国時代の粗製土器に関しては、矢澤氏による論考がある(矢澤2006a, 2006b)。同じような遺構内部と外部の土器の質・量の相違は、ダハシュール、アメンエムハト3世のピラミッド複合体やサッカラ、ジュセル王階段ピラミッドの西側に位置する古王国時代のマスタバ墓等でも指摘されている。アメンエムハト3世のピラミッド複合体では、内部の埋葬室に納められた土器群は良質のもので、赤色スリップ、磨きが施される特別なものである。一方、外部からは、通常の粗製の土器が大量に発見されている(Do. Arnold 1982)。また、サッカラのマスタバ墓では、礼拝室の内部で発見された土器は、良質のもので、赤色スリップ、磨きが施され、胎土も石灰質のマール・クレイが用いられている。数が少なく、長期的に礼拝所内部での儀式に使用されていた可能性が指摘されている。一方、礼拝室の外部で発見された土器は成形や焼成が悪く、胎土も混和材を多く含むものである。大量に発見されていることから、一度祭祀に使用した後に廃棄されたと考えられている(Rzeuska 2003: 125-128)。
- 6) このような大型尖底壺はミート・ジャー(Meat jar)と呼ばれており、中に泥を詰め、封をし、骨を突き刺すことで、骨付き肉の擬似供物として機能していたとされる(吉村・近藤・河合他2004: 27-28; Yoshimura et al. 2005: 388)。出土例では、内部に泥が附着していた。
- 7) ウィーン・システムではNile B1にあたる。
- 8) こうした白色スリップの塗布は、清めを意味する可能性が指摘されている(Yoshimura et al. 2005: 388)。同じような白色スリップの塗布は、サッカラの古王国時代のマスタバ墓から出土した器台や鉢等の儀式用の土器に見られる。これまで、古王国時代においてこのような白色スリップはアラバスター製の容器を模倣したものとされてきたが、T. ジュースカ(Rzeuska)は、古王国時代の白色スリップの塗布された土器の集成を行い、白色スリップの観察から、清めを意味する可能性を指摘している(Rzeuska 2003: 128-134)。
- 9) ただし、中部エジプトのカウのワフカ墓(UC16125; Petrie 1930: 10, 23, pl.XIII.6)、ワフカ2世墓(D'Amicone 1988: fig.153)からも同じような特徴を持つ土器が発見されており、埋葬に特徴的なものではあるが、必ずしも王家に限られるものではない可能性も指摘されている(R. シストル(Schistl)氏のご教示による)。
- 10) このような特別な土器群の存在は、アーノルドやG. プラントン(Brunton)によっても指摘されている。アーノルドはピラミッド・ウェア(Pyramid ware)と呼んでおり、ピラミッドの外から出土した土器とは異なる特別な器形で、全体的な赤色スリップ、軽い磨研といった特徴を挙げている。また、古王国時代のいわゆるメイドゥーム・ボール(Meidum bowl)を模倣して作ったものの、特に焼成に関する技術の低さから表面の色調が一定せず、軟質の土器になったことも指摘している(Do. Arnold 1982: 57-58; Allen 1998: 40)。
- 11) 同様に、クィーンズ・ウェアを模したと考えられる土器がダハシュールの中王国時代第12王朝センウセレット3世時代のウェレット王妃の埋葬室からも出土しており、アレンはクィーンズ・ウェアを意図したものの、いくぶん粗く作られたものではないかとしている(Allen 1998: 46)。
- 12) このような大型皿には、供物の動物骨の他に、しばしば小型の土器が入れられることがある。ダハシュールのウェレット王妃の墓では、大型皿の中に円状の痕跡があり、この直径が共に出土した小型碗の口縁に一致することから、これらの土器が大型皿の中に入っていたと考えられている。このような状況は同じくダハシュールの中王国時代第12王朝センウセレット3世時代のサト・ハトホル墓等でも見られ、深鉢に擬似供物を表現した小型皿が詰まっていた(Allen 1998: 44)。
- 13) その他、個体数は報告されていないため、参考資料として以下を挙げたい。ラフーンの7号墓(センウセレット2世時代)からは大型皿、大型壺、深碗、碗、大型鉢、大型瓶(Brunton 1920: pl.XIX.55-59)、ラフーンのサト・ハトホル・ユネト墓(アメンエムハト3世時代)からは大型鉢、小型碗、深鉢、碗、壺、瓶(Brunton 1920: 22, pl.XIX.53, Petrie et al. 1923: 15-16, pls.LVI.2M3, 5H4, 5N2, 46D2, LVII.46M2, 46M3)が出土しており、中王国時代の墓から出土した土器には、小型皿・碗、瓶、大型皿・碗の組み合わせが見られる。また、これらの土器群には通常、クィーンズ・ウェアの特徴を備える土器が含まれている(Allen 1998: 42-47)。
- 14) 前述したように、大型尖底壺は中に泥を詰め、封をし、骨を突き刺すことで、骨付き肉の擬似供物として機能していた可能性が指摘されている。出土例には、内部に泥が残り、また口径が対応する封泥には、中央に穴が開いていた。実際に骨が突き刺さっていた例は発見されていないものの、その可能性を示していると考えられる(Yoshimura et al. 2005: 388)。

- 15) 岩窟遺構から出土した動物骨に関しては、イクラム氏による分析が行われている。岩窟遺構 (AKT01)、岩窟遺構 (AKT02) 東室から出土した動物骨については、撓乱のため、明確な結論は下されていないものの、特に西室から出土した動物骨の構成は、古王国時代に確立した埋葬に用いられる供物との関連が指摘されており、本稿の土器の分析結果を支持している (イクラム 2006: 45)。
- 16) ディール・アル＝バハリの第 11 王朝のメンチュヘテブ 2 世の葬祭殿では、中庭の岩窟遺構より、木棺、布にくるまれたメンチュヘテブ 2 世の彫像と共に封泥の付いた壺、赤色の皿、動物骨等の供物が発見されている (Carter 1901: 202)。
- 17) ダハシールでは、第 13 王朝のホル王の埋葬に伴い、祠堂に納められた王のカー彫像が発見されている (De Morgan 1895: 98, fig.211)。祠堂の内部および周辺から赤色の土器が出土していることから、彫像に伴うものであると考えられる。
- 18) これまでコプトス (Adams 1986)、ヒエラコンポリス (Quibell 1900: pls.XLII-XLV; Quibell and Green 1902: pl.XLVII) 等で、古王国時代の神々の塑像、彫像を埋納した例が見つかったが、出土コンテクストが十分に報告されておらず、どのような意味を持っていたかについては不明な点が多い。
- 19) 神の墓としては、いわゆる「セノタフ (空墓)」のカテゴリーに含まれるオシリス神の墓がよく知られているが (Wegner 2001b: 248)、それ以外の神々の墓はこれまで確認されていない。従って、アブ・シール南丘陵遺跡の岩窟遺構が、神の墓、もしくは「セノタフ (空墓)」にあたるものかどうかは、なお検討を要する。
- 参考文献
- Adams, B. 1986 *Sculptured pottery from Koptos in the Petrie Collection*. Warminster, Aris & Phillips Ltd..
- Allen, S. J. 1998 Queens' Ware: Royal Funerary Pottery in the Middle Kingdom. In C. J. Eyre (ed.), *Proceedings of the Seventh International Congress of Egyptologists*, 39-48. Leuven, Peeters.
- Arnold, Di. 1987 *Der Pyramidenbezirk des Königs Amenemhet III. in Dahschur, Band I Die Pyramide*. Mainz am Rhein, Philipp von Zabern.
- Arnold, Do. 1982 *Keramikbearbeitung in Dahshur 1967-1981. Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 38: 25-65.
- Arnold, Do. 1988 Pottery. In Di. Arnold, *The Pyramid of Senwosret I*, 106-146. New York, The Metropolitan Museum of Art, New York.
- Aston, D. A. and B. G. Aston 2001 The Pottery. In G. T. Martin, J. van Dijk, M. Raven, B. G. Aston, D. A. Aston, E. Strouhal and L. Horácková, *The Tombs of Three Memphite Officials, Ramose, Khay and Pabes*, 50-61. London, The Egypt Exploration Society.
- Bourriau, J. 1988 *Pharaohs and Mortals, Egyptian Art in the Middle Kingdoms*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Bourriau, J. and D. A. Aston 1985 The Pottery. In G. T. Martin, *The Tomb-Chapels of Paser and Ra'ia at Saqqara*, 32-55. London, The Egypt Exploration Society.
- Bourriau, J., P. T. Nicholson and P. Rose 2000 Pottery. In P. T. Nicholson and I. Shaw (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, 121-147. Cambridge, Cambridge University Press.
- Brunton, G. 1920 *Lahun I*. London, British School of Archeology in Egypt.
- Carter, H. 1901 Report on the tomb of Mentuhotep I, *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 2: 201-205.
- De Morgan, J. 1895 *Fouilles à Dahchou, Mars-Juin 1894*. Vienna, Adolphe Holzhausn.
- De Morgan, J. 1903 *Fouilles à Dahchour en 1894-1895*. Vienna, Adolphe Holzhausn.
- D'Amicone, E. 1988 The Rock Tombs of the Governors of Qau el-Kebir: Wakhka I, Wakhka II and Ibu. In A. M. Donadoni Roveri (ed.), *Egyptian Civilization, Religious Beliefs*, 114-127. Turin, Edizioni Electa.
- Holthoer, R. 1977 *New Kingdom Pharaonic Sites, The Pottery*. Lund, Holmes & Meier Pub.
- Junker, H. 1929 *Giza: Bericht über die von der Akademie der Wissenschaften in Wien auf gemeinsame Kosten mit Dr. Wilhelm Pelizaeus unternommenen Grabungen auf dem Friedhof des Alten Reiches bei den Pyramiden von Giza I. Die Mastabas der IV. Dynastie auf dem Westfriedhof*. Wein und Leipzig, Holdr - Pichler - Tenpsky A.G.
- Kawai, N., K. Takahashi and K. Yazawa in press Middle Kingdom Pottery from the Waseda University Excavations at North Saqqara 2001-2003. In R. Schistl and A. Seiler (eds.), *Middle Kingdom Pottery Handbook: Regional Edition*. Vienna, Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Lancing, A. M. 1907 The Egyptian Expedition III. *Bulletin of the Metropolitan Museum of Art* 2: 163-169.
- Nordström, A. and J. Bourriau 1993 Ceramic Technology: Clays and Fabrics. In Do. Arnold and J. Bourriau (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, 168-182. Mainz am Rhein, Philipp von Zabern.
- Petrie, W. M. F. 1930 *Antaeopolis, The Tombs of Qau*. London, British School of Archeology in Egypt.
- Petrie, W. M. F., G. Brunton and M. A. Murray 1923 *Lahun II*. London, British School of Archeology in Egypt.
- Quibell, J. E. 1900 *Hierakonpolis I*. London, Bernard Quaritch.
- Quibell, J. E. and F. W. Green 1902 *Hierakonpolis II*. London, Bernard Quaritch.
- Rzeuska, T. I. 2001 The Pottery from the Funerary Complex of Vizier Merefnebef (West Saqqara). The Evidence of a Burial and Cult of the Dead in the Old Kingdom. In J. Popielska-Grzybowska (ed.), *Proceedings of the First Central European Conference of Young Egyptologists. Egypt 1999: Perspectives of Research Warsaw 7-9 June 1999*, 157-167. Warsaw, Institute of Archaeology Warsaw University.
- Rzeuska, T. I. 2003 Some Remarks on the Old Kingdom White Painted Funerary Cult Pottery from West Saqqara. In J. Popielska-Grzybowska (ed.), *Proceedings of the Second Central European Conference of Young Egyptologists. Egypt 2001: Perspectives of Research Warsaw 5-7 March 2001*, 125-134. Warsaw, Institute of Archaeology Warsaw University.
- Wegner, J. 2000 The Organization of the Temple *nfr-ka* of Senwosret III at Abydos. *Ägypten und Levante* X: 85-125.
- Wegner, J. 2001a The Town of Wah-sut at South Abydos: 1999 Excavations. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 57: 281-308.
- Wegner, J. 2001b Cenotaphs. In D. B. Redford (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Ancient Egypt: vol.2*, 244-248. Cairo, Oxford Univ Pr Childrens Books.
- Yoshimura, S. and N. Kawai 2002 An Enigmatic Rock-cut Chamber: Recent Waseda University Finds at North Sakkara. *KMT: A Modern Journal of Ancient Egypt, Summer* 13-2: 22-29.
- Yoshimura, S. and N. Kawai 2003 Finds of the Old and Middle Kingdoms at North Saqqara. *Egyptian Archaeology* 23: 38-40.
- Yoshimura, S. and N. Kawai 2005 Japanische Ausgrabungen an einem

- Hügel im Nordwesten Sakkaras. *Sokar* 11: 8.
- Yoshimura, S. N. Kawai and H. Kashiwagi 2005 A Sacred Hillside at Northwest Saqqara: A Preliminary Report on the Excavations 2001-2003. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 61: 357-398.
- イクラム S. 2006 「動物遺存体の分析」『エジプト学研究』別冊第10号 44-49頁。
- 河合望 2006 「エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡岩窟遺構出土の塑像群について」『日本西アジア考古学会第11回総会・大会要旨集』27-31頁。
- 高橋寿光 2006 「エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡岩窟遺構出土の中王国時代の土器に関する一考察」『日本西アジア考古学会第11回総会・大会要旨集』32-37頁。
- ファハミー A. 2006 「植物遺存体の分析」『エジプト学研究』別冊第10号 50-55頁。
- 矢澤健 2006a 「アブ・シール南丘陵遺跡、石積み遺構南側堆積から出土した土器群について」『エジプト学研究』第14号 印刷中。
- 矢澤健 2006b 「エジプト、アブ・シール南丘陵遺跡、石積み遺構南側から出土した土器群に関する一考察」『日本西アジア考古学会第11回総会・大会要旨集』38-43頁。
- 吉村作治・河合望・西坂朗子・近藤二郎・長谷川奏・中川武・柏木裕之 2003 「早稲田大学第10次アブ・シール南丘陵頂部発掘調査概報」『ヒューマンサイエンス』第15巻2号 78-92頁。
- 吉村作治・河合望・西坂朗子・近藤二郎・長谷川奏・中川武・柏木裕之 2004 「早稲田大学第11次アブ・シール南丘陵頂部発掘調査概報」『ヒューマンサイエンス』第16巻2号 62-76頁。
- 吉村作治・近藤二郎・河合望・西坂朗子・中川武・柏木裕之・長谷川奏・菊地敬夫 2004 「発掘調査概報」『エジプト学研究』別冊第8号 20-50頁。
- 吉村作治・近藤二郎・菊地敬夫・河合望・西坂朗子 2003 「考古班報告」『エジプト学研究』別冊第7号 11-28頁。
- 吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・河合望・西坂朗子 2003 「考古班報告」『エジプト学研究』別冊第6号 11-43頁。

高橋 寿光

日本学術振興会特別研究員

Kazumitsu TAKAHASHI

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science